

石造物にみられる謎の「盃状穴」

「盃状穴」（はいじょうけつ）とは、石に穿（うが）たれた盃状（さかずきじょう）の窪み穴のことである。

「盃状穴」は、西日本一帯で、寺社の境内などにある石燈籠の台石・手水鉢（手洗い鉢）・石段・石橋などの石造物や特定の岩によく見られるという。しかし、石仏石塔に関しては特には見られないようである。これは恐れ多くも信仰の対象物を傷つけないためであろう。呉市の下蒲刈町（しもかまがりちょう）を中心に歴史や民俗を幅広く研究なさっている柴村敬次郎氏※1によると、このあたりでも石仏石塔の盃状穴はみられないとのことである。

この「盃状穴」の信仰は、江戸時代には盛んであったようであるが、明治以降の石造物には盃状穴があまり見られないことから、明治以降になると何故か衰退したと推定されている。この信仰に関してはまだ解明されておらず謎の習俗としてとらえられているようである。埼玉県の東京に近い蕨市では、蕨市史調査報告書第八集「蕨の石造物」（平成4年刊）によると「凹の残されている石造物はすべて江戸時代のものであり、（調査の時点で）明治以降のものは一基も見えないことから、明治以降この風習は廃れてしまったため、このような風習があったということが伝わらなかったのであろう。」としている。全く同感である。

昔は「盃状穴」という名称はなかった。単に「穴」と呼ばれていたようだ。この「穴」は、子供たちのままごと遊びに利用され、特に、ヨモギなどの草を穴に入れ、棒で搗いてすりつぶして遊んでいたという。

「盃状穴」は、昭和55年（1980）の山口市の神田山（こうだやま）古墳群の発掘で、斜面に埋もれていた箱式石棺の蓋石の表面に、直径約2～3センチメートルの大きさの穴が合計21個確認されたことから、国分直一（こくぶなおいち）氏（当時、梅光女学院大学教授）によって名づけられたものである※2。

江戸期に見られる「盃状穴」が少なくとも埼玉県や東京都にも見受けられるので、西日本から関東一帯にまで広がっていった習俗であったのであろうか。東日本一帯ではどうであろうか。埼玉・東京では、盃状穴が石仏石塔にも見られる。石仏石塔の「盃状穴」は、石仏・石塔の台石の上部面の他に、石仏石塔の表面や側面・裏面・頂部面などにもあり、台石以外の垂直面で「盃状穴」があるのは、西日本一帯で見られる盃状穴の様子からすると、むしろ例外と言えよう。それゆえ、西日本から関東（江戸近辺）に伝わったと考えれば、伝わってから石仏石塔の信仰上重要な部位までも小石で傷つけてしまうという独特の風習に変わり、この風習は巡礼などを通して関東各地に広がったと推定できないだろうか。

盃状穴は、本家本元の西日本では、いち早く廃れてしまったために、その習俗が今となつては分からないのであろう。遅れて広まったと思われる関東では、それゆえに盃状穴の習俗が遅くまで残っていたのであろう。その例としてあげると、人の多く集まる浅草寺そ

ばの錢塚地蔵尊の「カンカン地蔵」は、かつて江戸やその周辺で行われていた盃状穴の風習が、多くの人を訪れた場所ゆえに廃れずに今日まで残っていたのではないだろうか。現地の解説板では「このお地蔵さまは、お姿の原型をほとんど残していない。古来よりお参りの方が付随の『小石』で御身をごく軽く『たたき』お願いごとをする。石で軽く打ち祈ると『カンカン』という音が鳴るので俗にこのように称されている。金龍山浅草寺」と説明されている。さらに関東の手前ではあるが、山梨県内の例として、東洋大学民俗研究会発行の「右左口（うばぐち）の民俗——山梨県東八代郡（ひがしやつしろぐん）中道町（なかみちまち）右左口地区——」（昭和59年）の中で、「自分の体の悪いところと同じ部分を用意してある丸い石で叩くと病気が治るといふカンカン地蔵」の事例があげられている。

「盃状穴」のできかたについては、雨垂れや子供のいたずらで出来たのではないかと言われることもあるというが、誤りであろう。その他に、油を注いで灯をともし燈明皿代わり穿たれたものとも言われているという。国文直一氏は、ヨーロッパ（「カップマーク」と呼ばれている）から東アジア（韓国では黄龍潭教授※3によって「性穴」と命名されたという）にかけて広く見られている盃状穴とのかかわりから、女性の性器を意味し、多産や再生、不滅への願いが表現されているとの説を唱えている。しかし、神田山古墳群の石棺の蓋石に見られた「盃状穴」と江戸期に多く見られる「盃状穴」との間には、千数百年間の空白があるようで、つながりや関連は全くないのではないかと考える。結局は「盃状穴」がどうしてできたのか、本来の盃状穴の習俗については、今となってはよくわかっていないのが現状である。

寄居町出身の酒井正（ただし）氏（さいたま市南区鹿手袋7-14-28）によると、「もう60年以上の昔（昭和20年代初期）のことです。寄居町にいた頃の当時、数人の婆様が、寺への出入りの際、門前の毘沙門天塔と隣の月待ち塔の台石の凹み穴を小石で打ちながら小声で祈っていました。ある時はまた、近所の女兒が数人でままごと遊びに凹み穴へドングリを盛ったり、草の葉を叩き擦ったりもしていました。」という。貴重な証言である。酒井氏は、石造物に見られる穴である盃状穴を「凹み穴」とわかりやすく表現している。

盃状穴は、信仰上何かを念じて祈りながら小石を打ち、或いはこすり続けた人々の繰り返しの結果できたものと考えるのが自然であり、石造物に小石を打ち続けながら、或いは盃状にこすりながら、さまざまな祈願をした信仰ではないかと推定できようか。この時に真言や念仏、お経などを唱えながら行っていたのであろう。

この資料は未完成ながらも、酒井氏の紹介で盃状穴のことを知り、酒井氏、蕨市立歴史民俗資料館の小要博氏、当会の秦野秀明氏の協力があったからこそ書き終えることができたことをここに記す。西日本と関東の盃状穴の習俗の違い、東日本での分布状況や各地の盃状穴の習俗はどうなのだろうか。盃状穴に関しての詳細な知識がない私にとってはいろいろと疑問が沸き、本当はどうであったのかとの真実を知りたい気持ちで一杯である。

以上の盃状穴に関する考察に関して、さまざまな情報や忌憚のないご意見を伺いたい。

平成22年1月25日

NPO 法人・越谷市郷土研究会 加藤幸一

資料1. さいたま市に見られる石仏の盃状穴



上図は、さいたま市の他に、台東区（浅草寺そばの銭塚地蔵尊）、藤沢市（力石）、静岡市（道標）の石造物も含む。上図の②は、前述で触れた「カンカン地蔵」である。

さいたま市在住の酒井正（ただし）氏の著書「郷土の石佛」（平成22年1月25日・寄居孔版社発行）の中の『凹み穴のある塔』より抜粋した。

なお、前述した「蕨の石造物」の執筆に携わった堀江清隆氏は、「三学院（蕨市北町三丁目にある寺院）の子育て地蔵の（台石にある）凹（くぼみ）でモチグサ（よもぎ）を叩いて（或いはこすって、ご飯などに入れて）食べると病気になる」との事例をあげ、このような凹み（盃状穴）のある石造物を「凹石（くぼみいし）」と名付けている。

資料2. 東京に見られる石仏（庚申塔）の盃状穴

子育て地藏堂（墨田区東向島三丁目の旧・墨堤そば）境内地



現在では小石でたく風習は全く見られていない。かつてあったであろうことも全く忘れられ、「長い期間にわたって水をかけてきたために、このように石仏下部の表面が溶けてきたのではないか」と思われている。どれもが江戸期の石仏。（平成21年12月撮影）

補説

※1（1頁の本文5行目）

柴村敬次郎氏による盃状穴の風習の聞き取り調査によると、次のとおりである。

（私が）調査をしている際に明治生まれの老人（男）から聞いた話ですが、農家の多い集落では「ヨモギ」を、漁家の多い集落では「アオサ」（海藻の一種）を穴に入れ、「石の棒でたたきながら、ねばくなるまで、女の子を冷やかす性に関する言葉を発しながら搗いていたよ」ということを聞きました。

※2（1頁の本文19行目）

「盃状穴」の用語は、国分直一氏が、江上波夫・木村重信両教授による「**The Eternal Present :The Beginnings of Art**」（ギーディオン著）の邦訳を採用したものである。

国分直一氏によると、「昭和 50 年代初葉に調査が行われた福岡県三蜘蛛遺跡の弥生前期の支石墓の蓋石に見出されている」とし、これは写真と実測図を見る限り「明らかに人為的に施された盃状穴であるように見える」としている。現在は、新設された道路敷の下に埋め戻されたため、直接確認することはできないという。（以上は、国分直一監修の「盃状穴考」より）

※3

2頁の本文13行目

黄龍渾（ホアンヨンオン）氏は、ソウルの慶熙大学校の教授である。

黄龍渾は、「cup mark」を「性穴」と呼んでいる。

平成 22 年 2 月 3 日 加藤幸一

資料3. 越谷市内の大沢の香取神社に見られる盃状穴

加藤幸一

【文化十二年の石灯籠】

- ・火袋が潰れている。後方に見える道路と寺院は足立越谷線と大沢の光明院。
- ・下から二段目の台石の東西南北のすべての上面に「盃状穴」が見られる。



【左側面】（向かって右側面の竿部）

【台石の表面】

文化十二年乙亥年

※文化十二年は西暦一八一五年



〔正面〕

奉
獻

〔台石の表面〕



〔右側面〕（向かって左側面）

〔台石の表面〕



正月吉祥日

〔裏面〕

〔台石の表面〕

〔台石の文字〕



獻主
會田屋
大一
石工
八五郎

※秦野秀明氏による盃状穴の発見の知らせを元に平成二十二年二月に調査したものである。

資料3. 越谷市内の石仏に見られる盃状穴（大里自治会館）

大里公民館（東武線大袋駅の南東）は、昔の日光街道沿いにある秀蔵院と呼ばれた寺院跡地である。現在は地元の自治会館と共同墓地とを兼ねている。ここに盃状穴のみられる文字庚申塔がある。日光街道に沿ったこの地に、かつては、旅人や地元の人々によって、盃状穴の信仰が盛んであったであろうことがわかる。



文字「青面金剛」庚申塔の図



正面全体（盃状穴が三猿部にもある）



台石



頭部